

平成七年六月十八日 〆講演

「二十一世紀を展望した大学教育の在り方と問題点」

早稲田大学総長 奥島孝康先生

一 四国の果てから

このところ私は、故郷である四国についてさまざまなことを考えております。この三月にも宿毛を訪ねて、小野梓先生という早稲田大学の建学の精神的な支柱といわれる方のお墓を訪ねて、関係者の方からいろいろなお聞きしてまいりました。皆さんは、「えらく古い話をするな」と思われるかもしれませんが、私は、そういうところから逆に二十一世紀を展望するような手掛かりを掴もうと考えているのです。

何故かと言いますと、現在は、まさに世紀末であります。そして、近代日本の幕開けとなる明治維新が出現したのは、これまた前世紀の世紀末に近い頃であります。ところが、その世紀末の混沌の中から、新しい日本を展望していた人たちが何人も生まれたのです。現在の世紀末においても、新しい日本をどのように展望するかについては、いろいろな考え方があろうかと思えます。これもひとつの見方にしか過ぎま

せんが、私はここでは早稲田大学の総長という立場から、二十一世紀を展望してみようと思えます。

今日、私は、さきほど伊予の松山から帰って参りました。四国の松山と言うと、皆さんはすぐに正岡子規を思い出されることでしょうか。あるいは、漱石の『坊っちゃん』でしょうか。同時に、司馬遼太郎さんの『坂の上の雲』という小説をお読みになった方がいらつしやるのではないかと思えます。この『坂の上の雲』は、日本が生き残っていくためにはどうしても日露戦争は避けられない、ではどうやって強大なロシア軍を日本軍が破ることができるかという難問に、青春の全てを捧げた陸軍軍人・秋山好古と、海軍軍人・秋山真之の兄弟の物語です。この人たちが、新しい日本を創り上げていくためには、前に立ちふさがっているロシア軍といやでも一戦を交え、これを勝ち抜かなければいけない。そのためにはどうするかということのみを考えて、いわば、「坂の上の青い空に一朵

(いちだ)の白い雲がかがやいとすれば、ひたすらそのみをつめて坂をのぼってゆくであろう」という当時の若者のひたむきな姿勢が、『坂の上の雲』という小説のテーマになったわけであります。そういうふうには、時代の転換期にあつては、いつでも、何か歴史を動かすような大きな目標に向かってひたむきに取組んでいる若者たちがいるものです。今、君たちの中にもおそらくそういう人がいるに違いないと私は確信しております。

そうした若者の一人に小野梓という、早稲田大学の大学としての精神的基礎を築き上げられた方がいらつしやいました。この方は、土佐でも、非常に田舎である宿毛というところからお出になつた方であります。日本でも辺地といわれるそういう田舎から、十七才で戊辰戦役に従軍し、明治四年には十九才でアメリカへ渡り、そしてさらにイギリスで学び、日本へ帰つて政府に出仕するわけでありますが、なかなか志が得られませんでした。そのときに義兄であり、

かつ、大隈派の一人であった小野義真という方のアドバイスを受けて、大隈さんの惟幕に馳せ参ずるわけです。小野義真さんは、実は小岩井農場や日本鉄道株式会社を創設した一人であり、日本鉄道界の恩人と言われる方であります。この方も、やはり宿毛から出られた、大変人望のある方です。岩崎財閥の大番頭とも言われた人ですから、財政に通じていたのでしょうか。とにかく、お金を出して小野さんを勉強させます。この勉強が早稲田大学のバックボーンとなるのです。

早稲田大学の誕生は、ご存じのように、明治十四年の政変の結果といえます。政変の少し前から、大隈重信が過激な国会開設の意見書を提出したために、長州や薩摩の藩閥の領袖たちが大変不安を感じて、政府部内が揉めていた。そこへ「北海道開拓使官有物払い下げ事件」が起こった。開拓使長官であった黒田清隆という薩摩の軍人が、官有物を政商に払い下げしようとする。それは不正だと、大隈さん自身よりも大隈さんを取り巻く自由民権派の人たちが、それを糾弾した。そのため、大隈さんに対して危機感を抱いた薩摩、長州の連中が、東北巡幸からお帰りになった明治天皇を訪ねて、「自分達を取るか、大隈を取るか」と詰め寄った結果、一夜にして、大隈さんは筆頭参議の座から引きずり降ろされ謀反人とされたのです。そこで小野

さんも、大隈さんと一緒に会計検査院を辞めて、早稲田大学を創ります。しかし、そういう経緯があったというとは別にして、小野先生は早稲田大学において学問の独立を説き、そして将来、近代日本の建設に必要なあらゆる人材を一校で供給するという意気込みをもって早稲田大学を創られたのであると大隈さんのちに述べられています。いずれにしても、小野先生は、大変な意気込みで早稲田大学を創られました。

この宿毛から出た小野梓先生が大変優れた方であるということは、『国憲汎論』という明治期最高の著述が証明しています。この書が自由民権のバイブルとなるのです。明治初期には自由民権運動が起こって、板垣退助を中心とする自由党が出来たことは皆さん方もよくご存じですね。自由党はほとんど土佐藩の人間関係だけで作られていました。その中の一人、例えば林有造の血筋は、ずっと政治家として現在に至るまで続いております。また、例えば、戦後間もない吉田茂首相の時代に、林譲治という政治家がいますが、その名前は、皆さんの中にはご存じの方もあるいはいらつしやるのではないかと思います。それから、大江卓、さらに、吉田茂さんの実兄である竹内明太郎、この方は理工学部を寄付された早稲田の大恩人ですが、その実父の竹内綱も自由党の有力な一

員であります。こういう人達がこぞって宿毛から出てきたわけです。宿毛は土佐藩に属しますけれども、土佐藩主の一族の者が、支藩として事実上独立に近い形で統治していた辺地であります。

そういう辺地からどうしてこうした優れた人たちが出てきたんだろうと、私は大変不思議に思っております。宿毛でいろいろの人に話を聞いてみましたら、こういうことがわかりました。それは、どうも宇和島藩の影響ではないか。私の故郷の日吉村も宇和島藩の支藩である吉田藩に属します。ご存じのように、宇和島藩には幕末において、伊達宗城という名君主がいらつしやいました。そのもとで大変学問が盛んになって、明治時代の法曹界の中心的な人物はほとんどここから出ています。例を挙げますと、民法を創った穂積陳重とか、大津事件の大審院長・児島惟謙などは宇和島藩出身の代表的な人物であります。その宇和島藩の圧倒的な影響のもとで、宿毛においても学問が盛んになったのではないかと考えられているわけです。しかしその宇和島にしても、宿毛と同じように、いわば四国の辺境の地です。なぜそういうところに新しい学問の芽が出てきたのかというところ、それはもっぱら伊達宗城という名君主自身のおかげのようです。宇和島藩は仙台の伊達藩のいわば支藩であり、仙台の伊達藩の初代藩主は伊達政

宗であります。伊達政宗は、

「馬上少年を過ぐ、世平らかにして白髪多し、
残軀天の赦すところ、樂しまずしてこれを如何
せん（馬上少年過 世平白髪多 残軀天所赦
不樂是如何）」と詠いました。この漢詩から名
を取った『天赦園』という名園が今でも宇和島
には残っています。やや詳しいことを言います
と、伊達政宗の長子が伊達秀宗という人でした。
秀宗とは、豊臣秀吉の秀という字を一字もらっ
たようです。豊臣秀吉の、いわば養子という形
をとっていたわけです。そこで幕府を憚って、
伊達政宗は秀宗に家督を継がさなかった。その
ため徳川家康は政宗の心中を慮って、秀宗を宇
和島十萬石に封じたという、ややこしい経緯が
あって、四国の果てに仙台と同じ伊達藩があり、
そして四国の果てで仙台と同じような風習が
いまなお存続しているのです。

そこでさきほどの話に戻りますけれども、ど
うして世界を視野においた学問が辺境の地で
起こったのかということを考えてみますと、こ
れはあるいは間違っているかもしれませんが、
当時はむしろ中央にいるよりも地方にいるほ
うが世界が見えたということではないかと思
われるのです。あの幕末の大きな時代のうねり、
あるいは激動というものは、江戸の真ん中に棲
んでいるよりも、むしろ地方にいる人のほうが、
かえってよく見えたということがあったので

はないか。だからこそ倒幕の兵は鹿児島や山口
から起こり、地方から続々と優秀な連中が倒幕
戦に参加し、そして小野梓先生のような方も出
てきたというわけであります。

小野梓先生が地方から出てきたもう一つの
きっかけというのは、宿毛に、酒井南嶺という
儒者がいらつしやいました。幕末においては、
優れた方が各地にいっぱいいらつしやいます
けれども、酒井先生はとても変わった人であり
ました。何故ならば、宿毛の田舎にいて、常に
「日本人、酒井南嶺」と名乗っておられたから
です。日本という国家を意識する人のまるでい
ない時代に、宿毛の田舎にいて、「日本人、酒
井南嶺」などとわざわざ名乗られるということ
は、宿毛にいなながら、眼はすでに世界を見て
たということであろうと私は思っています。つ
まり、日本以外の国を意識しなかったら、日本
人と名乗る契機はないわけです。その酒井
先生の薫陶を受けた小野梓先生は、のちに、「東
洋」と号します。「Asia」という号を名乗るわ
けです。つまり小野梓先生は、酒井先生を一步
越えて、自分はアジア人である、アジア人の一
員であるというアイデンティティ (identity)
を主張されたわけです。これまた、当時の日本
人としては大変な見識であろうと私は考えま
す。そのように、幕末という世紀末において、
常に世界というレベルで物事を見ていた人た

ちがいて、その人たちの物の見方は、いまから
見てもいささかも誤っていない。それどころか
その人たちの意見・主張が後に退けられたから
こそ、その後の日本の屈折した歩みが始まった
と私は考えているわけであります。

二 私大の建学の精神とは

ですから、二十一世紀という世紀を前にした、
明治の頃とは別の意味の世紀末を迎えている
現在、私たちが次の世紀にどのような希望を託
していくことができるかという、相当確固たる
見通しをもっていなければ、日本自体の進路を
誤ることになるだけではありません。人類の未
来にも影響がでできます。また、ここで教育の
あり方について大きな誤りを犯したら、これは
将来の日本にとって取り返しつかないこと
になります。ですから教育者たる者は、とりわ
け大学の在り方としては、二十一世紀というも
のをどういうふうに考えていくのか、そこにっ
いての誤りのないしつかりとした選択、あるい
は先見性をもった方向づけを確立していなけ
ればいけない。それが世紀末に居あわせた大学
人のなにより大切な務めであると思います。
そういう考え方のもとで、私は今、早稲田大学
では、『グローバル・ユニバーシティ (Global
かつ Local な University)』というスローガン
をたてまして、そのもとに、大学改革を進めて

いきたいと考えています。

今の小野先生の話でもおわかりのように、国際化を考えるとということはどういうことかと言うと、実は、それは日本人としてのアイデンティティというものをいかに確立するかということなのです。国際化というとき、一般的には「日本人がみんなアメリカ人になればいい」と言わなければならないの見方を提供しがちです。しかし、そうではありません。国際化の時代を迎えたということは、逆に民族としての、あるいは国民としてのアイデンティティをいかに確立するかということであり、そして二十世紀を展望するときには、もはや国境というものはほとんど意味を持たないわけですから、それぞれの民族あるいは地域のアイデンティティというものが大切になってくるわけがあります。

幸いなことに私は、早稲田大学の素晴らしい在外研究制度により、パリ大学交換研究員として二年半余りパリで遊ばせていただきました。留学というものは、まさに「学を留める」ことであると心得て、身も心ものんびりと過ごさせてもらいました。世界を見てやろうというつもりで、いいかえれば、少しばかり歴史観を養ったり思索に時を過ごしたいと考えましたけれども、なんのことはない、ただぼんやり時を空費していたわけでありませぬ。しかし、そういう

ぼんやりしているパリの生活の中から、徐々に私の中に確信を形作っていったものがありました。それは何かといいますと、国際化とは地域とか民族とかのアイデンティティを確立することだという確信です。ヨーロッパは、ご存じのように、国際化という意味では最も先進的な地域であります。かつて、国際法といわれるものはヨーロッパの法にすぎませんでした。だからこそ、東洋はヨーロッパ人から見れば搾取の対象でしかなかったのです。東洋もアフリカも、そして、南米も北米もそうでした。そんな地域は、ヨーロッパ人から見れば世界の外ですから、自分たちの略奪の対象である、それを他国より先に奪えばいいと考えていた。国際法に有名な「先占の法理」という理論があります。「先占の法理」とは、先にそこを占領した者が、自分の物にすることができるという法理です。そこには中国人、インド人、アフリカ人、インディアンなどが住んでいたとしても、世界の外ですから、人間とは見ていないわけです。それが、要するにヨーロッパ中世の「世界」という観念でありました。しかし、ヨーロッパにおいて、そういう「世界」という観念が出てくるのは必然性があります。それは、小さな国がみんな国境を接して共存しているからであります。日本人ではとても考えられません。私は留学中、フランスとスペインの国境をやたらに出

たり入ったりしたもので、密輸でもしているんじゃないかと思われたらしく、怪しいとばかりかなり長時間官憲に調べられたこともありました。しかし、国境を出たり入ったりするのはとても面白い経験でした。というのは、わずかな小さな小川一つで、あるいはわずかに針金一本で国が分かれています。そして、国が分かれると、言葉が違う、家の形が違う、料理が違う、服装が違う、生活風習が違う。

どうしてそういうことが起こるのかということが、当初私には疑問でした。日本人なら、すぐにどちらかに同化されてしまう。力の強い方にそれこそ一挙に同化されてしまいます。ところがヨーロッパではそうはならない。つまり逆に言うと、国際化されているからこそ、ヨーロッパの人々は、自分たちのアイデンティティを頑なまでも、あるいは、命がけで守り、そして独自性を作り上げていかなければいけないのだということに、早くから気づいていたのです。いずれにしても、そういう長い歴史を、彼らヨーロッパ人は生き抜いてきたわけでありませぬ。それが私は国際化の時代であると思っております。日本は幸か不幸か、他国との国境を海で隔たれているために、そのようなシビアナ思いをしたことはありません。ですから、国際化というものは、ただアメリカナイズされることであるとか、あるいはヨーロッパナイズさ

れることであるという、そういうふうな感覚を持つておられますけれども、とんでもないことです。国際化の時代にこそ、日本人としてのアイデンティティを確立しなければいけないのです。日本人独自の良い面があるとすれば、それを伸ばさなければいけないし、ないとすれば、それを作らなければいけません。国際化の時代とはそういう時代だと私は考えています。

そのことを、先程の小野梓先生は外国で肌で感じられて、それを日本に持って帰られたんだと私は考えています。いま「学問の独立」が早稲田大学の建学の理念だと誰かに言ってみても、そんな言葉から受けるインパクトはゼロに等しい。しかし何故、当時「学問の独立」という言葉がインパクトを持ち得たかと考えてみると、どうも単なる字面だけのせいではない、もっと何かがあったはずですよ。いままでは、「官」という立場からの学問に対して、「民」の立場からの学問という意味で、早稲田大学の学問の独立という主張をしたのではないかと考えられていました。しかし、私はその理解をもう一步進めるべきではないかと、以前から考えており、ようやく最近になって自分なりの独自の解釈に到達しました。それは小野梓先生が留学した当時のアメリカの学問の環境、それからイギリスの学問の環境というものを考えてみると、ある意味で答えが出てくるのではないかと

と思えるようになったからです。

小野梓先生がアメリカへ渡ったのは一八七一年でありますが、その頃からアメリカでは大学改革が始まります。それまでアメリカでは、大学というものは日本の戦前の大学と同じで、先生が何かを読み上げる、学生はそれをその通り覚える、例えばラテン語を暗唱するというような徹底した口移しの授業で、先生の言う通りに暗記するだけ、それを書くだけというような学問でした。そういう学問に創造性がないのは当然です。それではいけないということで、現在まで続く競争講座化、具体的には科目の自由選択制という考え方が、当時のアメリカに登場してきたわけでありまして。それがまずハーバード大学においてでありました。

小野梓先生は次にイギリスへ行きます。イギリスでは、それ以前はオックスフォードとケンブリッジという大学しかなかった。オックスフォードもケンブリッジもイギリスの国教系の坊さんの学校であります。だから、パリ大学と同じ、ある意味の神学大学であり、宗教が支配する大学であります。ところが、その頃から、ダーウィンが世界一周をやり、『種の起原』（一八五九年）という本を出しましたが、当初はこれがオックスフォード、ケンブリッジ両大学において排撃されました。当然です。なにしろ

進化論という考え方、猿が人間になったなどという考え方は、宗教学者にとっては絶対に許すことのできない考え方でした。ですから、ダーウィンの考え方は、オックスフォード、ケンブリッジでは受け入れられなかった。しかし、両大学でもそれを認めざるを得ないような状況がやがて出てきました。それは科学の力でありまして。つまり、大学の非宗教化が始まったのです。その頃に、イギリスでも新しい大学の動きが出て、ロンドン大学という市民大学ができました。これは都市が創った最初の大学です。それから、いろいろな都市が次々と大学を創るようになってきます。つまり、大学間で学問の競争が起こってきたわけでありまして。

そういった時代を留学中に経験した小野梓先生は、おそらくは、学問というものは「競争」であり、学問というものは既成の理論に対する「反逆」であるという信念をお持ちになったに違いない、私はそう推測しています。だから、「学問の独立」という言葉自体はソフトだけれども、学問は競争であり反逆であるということが前提になっているんだという過激な思想が背後にある。それが早稲田大学において「学の独立」という形で取り入れられたからこそ、当時の人たちはその意味を了解した。というのは、早稲田大学を創った初期の東京大学出身の人たちはみんな英米派だったんです。英米派の学

問の環境、あるいはバックグラウンドというものが見えていたから、その意味が、彼らには大変心打たれる言葉として響いたと考えられ、そのことが、早稲田大学の独自の校風を生む大きなエネルギーになったというふうに考えるのです。

私がここでお話ししているのは早稲田大学についてであり、あまりにもそのことばかりを強調しているのでは、早稲田大学の学生ではない方々は反発を感じられるかもしれません。しかし、これは私立大学の一例を語っているわけでありまして、それぞれの私立大学は、それぞれの私立大学としての独自の「建学の精神」を持っています。そういうものを当時の人たちがどう考えたのか、そしてそこから我々は未来に向って何を汲み取るかということを決えず考えなかつたら、私立大学の存在意義というものは無いに等しいと私は思っております。皆様方もそういうことを考えていただく手がかりとして、こういう話をしていくわけです。

さて、私は今、ダーウィンの『種の起原』という話をしました。これは、極めて象徴的な学問の大きな転換点であります。学問が新しく展開する一つの象徴的な事件というべきものである。そのこと自体が持っている学術的な意味よりも、それが学問全体に及ぼした考え方の百八十度の転換ということの意味の方が、私は

はるかに大きいと思っております。

三 二十一世紀の学問はどうあるべきか

そのことを考えていきますと、もうずいぶん昔の話でありますけれども、今西錦司先生の本を読む機会がありました。そのことに思い至りました。それは今西錦司先生が、京都大学の入学式で学生たちに語った言葉です。それは大要こうです。「君たち、二十一世紀は科学技術の世界だなんて、そんなふうに簡単に考えるな。二十一世紀が科学技術の世界だなどというふうに簡単に言えるものか。そんなもんじゃない。歴史というものが、そういうふうに必然性を持つて真つすぐ脇見もせず、二十一世紀が科学技術の進化する時代へ向うなどということには誰にもわからん。しかし、わかっている確かなことがある。君たちは今、京都大学に入学して京都にいます。この千年の古都には、その間に磨き上げられ、伝えられてきている様々な日本人の心とも言えるべきものがいっぱいある。謠も、そうだ、能も、そうだ。いろいろな、そういうふうな芸事というふうなものがいっぱいあるではないか。これは千年に渡って続いて、磨き抜かれている。更に千年続くに違いない。君たちは、次の時代は科学技術の時代だなんていうふうに言われて、それで踊つてただけじゃだめだ。人間として生きていくからには、伝えてい

かなければいけないものがある。そういうものを今、君たち、少し学んでみるという、そういう心の余裕を持ってみてはどうか。こういうことを語りかけていたんですね。私は正直いって、その言葉にイカレました。

そこで、私はその後、今西さんの本をいろいろと読むことになるわけです。ご存じのように、今西先生の学問の出発点となった「棲み分けの理論」という素晴らしい学説があります。「棲み分け」というのは、言葉は簡単ですけれども、これはどこにでも応用が利いて、そこに言われていることの含蓄は実に深淵です。これを中学生の時すでに、カゲロウの観察をしながら今西さんは考えつかれたわけです。そしてこの棲み分けの理論をもとに、遂にダーウィンの進化論を否定する考え方を主張されるところにまで到達されます。棲み分けの理論という理論自体はコロンブスの卵です。われわれは学校で優勝劣敗の法則、弱肉強食の法則、つまり、ジャングルの法則を習います。強い者が勝つ、優れている者が生き残る。けれども、本当にそうだろうか。今西さんは、その棲み分けの理論を出すことによって、強い者が常に生き残っていくわけではなく、弱い者もちゃんと生き残っていくように棲み分けられている世界というものを理論として一般化されたわけでありまして。いわばダーウィンの言う必然説に対して、そうい

うふうな説があるかどうかわかりませんが、偶然説とも言うべき学説を主張されたわけであります。

私は、世の中には確かに必然的なものがいっぱいあると思っています。その観点から、私はいつも「運は実力のうち」と学生達に語っています。よく「自分は運が悪かった」などと言って嘆いている者がいますが、多くの場合、そんなことはない。運は実力のうちだと私は思っています。もっと怖いのは、「医者を選ぶのも寿命のうち」ということです。下手な医者にかかって殺されたら、それは仕方がない。それはその人の寿命です。そういうことが、いっぱい世の中にはあるわけです。だから、そういう意味では、世の中には偶然というものが作用することは非常に多いのです。しかしまた、マルクスの言うように歴史を非常に大きな観点から見えていきますと、ある意味で必然説をどうしても否定し得ないような、そういう進化が見られるのも事実でしょう。

私は、必然説がいいとか、偶然説がいいとかということを端的に言える立場にありませんし、もとよりその能力もありません。むしろそんなことよりも、世の中には単なる必然性ばかりで物事を考えるのではなくて、「いやあ、人間なんていうものはだらしがないのだから、もつと違った考え方だつてあり得るんじゃない

かな」と、大らかに物事を見ていく。それぐらいの気持ちの余裕がなかったら、相対性理論とか、超伝導などという考え方は通常の論理では出てこないわけです。そういうことはいくらでもあります。ブラックホールなどという現象は、なかなかそう簡単に説明できるものではありません。そういう世界が、実は科学の世界でもシビアな問題として我々の前に立ちほだかっているということを見れば見るほど、私達は今西さんのような大らかな考え方というものをもう一度見直さなければいけないと思っています。

そういうふうに見ていきますと、二十一世紀は科学技術の時代であるというような安易なものを見方をするわけにはいきません。そうではなくて、科学技術はもちろん進化するでしょうが、今言われているような科学技術であるかどうかはわかりません。いつか本財団の前川理事長とお話した時に、発想がものすごくユニークなので、私は大変感銘を受けたわけですが、でも、われわれももつと頭にフレキシビリティ (Flexibility) を持たさなければいけない。大学はまさにそういう時期に今さしかかっている。私は考えているのです。例えば今、世の中では、もう共産主義の計画経済が潰れたから、市場経済以外に経済の仕組みはないみたいということが言われておりますけれども、しかし本

にそうでしょうか。私はちつともそうした考え方を信用しておりません。本当に完全な市場原理が働くような世の中になるとはとても考えられないからです。だからといって、現在、市場経済という考え方以外に有効な考え方があるわけでもありません。しかし、社会主義的理想というものは全くの間違いかというと、そういうことでもないでしょう。社会主義の中にも取るべきものはいっぱいあります。

そこでは、私は、二十一世紀というものを考えるときに、何か一つの予断、偏見で世の中の方向を見るのではなくて、もつと豊かな世の中を作り出すような、多角的な思考をしなければいけないのではないかと、このところあれこれ考えているわけであります。そしてしかも、そういう条件ないし環境がわが国でも次第に出来つつあります。『インターネット』というシステムが今、どんどん使われるようになっています。いながらにして世界中の学者と討論することもできれば、情報も取ることもできます。今からはそういうテクニクを身に付けなかつたら、もう学問は駄目になります。しかし、最終的には何が大事かと言うと、そういう情報ネットワークで事が片付くわけではなく、最終的にはそれを介してヒューマンネットワークをどう構築するかということである、国際化と情報化の時代であればあるほど、大切なのは人間

と人間の関係であろうというふうに考えています。それと同時に人間と人間との関係に直接いく前の、もうひとつその中間にある関係というのをじっくり考えておかなければいけないのではないかと。それを大学で言えば、大学間のネットワークであります。今、ヨーロッパにおいては、『エラスムス計画』という一大プロジェクトがEUによって進められております。ヨーロッパの主要大学はこのエラスムス計画によって大規模な学生交流を進めており、そこでは研究教育のネットワークが出来上っているのです。どこの大学で学んでもよい、どこの大学とでも共同研究ができるというようなシステムになってきて、しかもそれが早くも一ランク進んだ『ソクラテス計画』へ移行しようという時期になっております。にもかかわらず、早稲田ではもちろん、日本ではまだ、そういう大学間のネットワーク作りすら行われておりません。わずかに希望が見えるのは、関西の私立大学においては、どこで学んでもよいという大学間ネットワークが京都を中心に組み始めたいようであります。私は、そういうことに期待しております。いまや一つの大学で何もかも出来るなどという時代は、もう終わりつつあるのです。

かつて、私は図書館長をやっておりました。一つの図書館で全ての資料を集めるのは、現代

ではこれはもう不可能というべきです。ですから、いろいろな大学で、分担収集ということが当時から課題になっておりました。それと同じことでありまして、学問分野を見ますと、今からの世の中では、たとえ東大であろうとも、一つの大学が全ての分野を担うなどということは、到底不可能な時代がやってきました。そこに、私は大学間の協力関係、つまり大学間のネットワークというものに、太平洋に、ヨーロッパに、全世界に広がっていく。そしてお互いの意見を交流しながら新しい時代を展望していく。私には先見の明がありませんので、その先に何が待っているかということをお話することはできません。私は一介の法学者にすぎません。そして、法律というものは基本的に事後処理的な側面を持っています。しかも、法律というものは基本的には手続論にすぎません。その手続論の側面からの二十一世紀の展望として、私は、今のようによくともネットワークを重ねていき、それを繋いでいき、さらにそれを拡大する、そういう形で未来の世界を展望することのできる新しい学問のネットワークを作り上げていかなければいけないと、今、考えているわけです。

いずれにしても、諸君はそのような世界でこれから生きていかなければいけません。それど

ころか、そういう世界を諸君が担っていかなければいけないのです。これは大変なことです。今のうちに思い残しの無いようにしっかりと遊んで、そして十分エネルギーを蓄え、健康な身体と柔軟な思考をもって、新しい時代に向けて大きくはばたいてほしい。そういうことを期待し、また、お願いして、私の話を終わります。ありがとうございました。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。